

特集「ナショナリズムの表現」：正成伝説 の「桜井駅の訣別」について

LEE, Chung Ho / 李, 忠浩

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

201

(終了ページ / End Page)

220

(発行年 / Year)

2010-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022635>

正成伝説の「桜井駅の訣別」について

李 忠 潜

1 はじめに

日本の歴史上、楠正成ほどその人物像に対する評価に浮き沈みの激しい人物はいないと言える。楠一族は、戦前・戦中には「七生報国」のスローガンの下で忠孝の模範として教科書にも登場するなど熱烈に顕彰されていたが、現在では逆に戦時下の国民動員の象徴ともいうべき存在となっている。とりわけ、現代の日本ではこのような忠臣正成像を想起させること自体が憚られる傾向がある一方、一部では天皇への絶対的な忠誠のシンボルとして崇拝されている。しかし、今日のこのような正成における両極端な受容は、前近代においてより多様な正成像が存在し、多くの日本人がその生きざまに共感していたという事実を見えにくくしていると言える。

『太平記』における楠正成は、後醍醐天皇の霊夢により初めて登場し、その最期となる「湊川の戦い」では、七度生まれ変わっても後醍醐天皇に仕えて朝敵を滅ぼさんとの誓いを立てた忠臣として描かれるほか、熱湯の計や藁人形の偽計をはじめとした奇抜な兵法を駆使する智略家としても活躍する。しかし、近世期に至ると正成伝説は『太平記』における忠臣・知略家のイメージに留まらずにさまざまな文芸ジャンルに浸透しながら多様な形で展開していくことになる。

『太平記』は近世初期においてはそのままの形以上に『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』）を通して広く受容されていた。『理尽鈔』は、『太平記』の合戦や事件あるいは人物などについて政道論・兵法論を述べた書物で、楠正成を兵学者の祖として崇拝した山鹿素行に代表される兵学者や大名たちといっ

た人々にとっては為政者の心構えを学ぶテキストとして読まれ、また大衆のレベルでも講釈の一形態である太平記読みの形で受容される。そして、その中でも楠正成に関する記事を題材としたものは最も流行した¹。

こうして正成にまつわるエピソードの享受が拡大する中で、元禄5（1692）年に水戸光圀によって摂津国湊川に正成を顕彰する墓碑である「嗚呼忠臣楠子之墓」の建碑が行われると、儒者たちの間では正成顕彰が盛んに行われるようになり、智略に優れた武将としてのイメージに加えて忠孝の模範としての楠正成像が広がっていくことになる。以降、武士層を中心に楠正成を題材とした書画がもてはやされ、儒者たちがその賛や跋を寄せる例は多く見られる。特に、水戸学では南朝正統論と結び付けて正成を称揚し崇拝したため、尊皇討幕の機運が高まるにつれ、正成の「忠誠」は、勤皇の志士たちの行動理念として大きく作用することになる。したがって、正成は江戸後期から幕末にかけての討幕の思想家たちの尊崇の対象とされていく。例えば高山彦九郎、頼山陽、真木保臣ら多くの勤王家が正成の墓所を詣でており、中でも三度正成の墓に詣でたという吉田松陰の座右の銘は正成の最期の言葉「七生滅賊」であった²。

このように、江戸期の正成は代表的な兵法家として、また、特に儒者たちの間では後醍醐天皇に最期まで忠誠を尽くした忠臣として顕彰される。その一方で、文芸ジャンルにおいては太平記評判、通俗軍書、浄瑠璃・歌舞伎などの演劇ジャンル、浮世草子・読本・黄表紙といった小説類、また辻講釈などさまざまなジャンルに描かれて活躍することになる。

まず、近世初期の流れの中で、『太平記』や太平記読みから楠正成に関わる伝説のみを切り取って物語化した通俗軍書が登場し、後の文学にあらわれる正成伝説の下地を整えることになる³。また、謡曲・古浄瑠璃・歌舞伎などにおいても『太平記』の劇化が盛んに行われ、謡曲では「湊川」「楠」「正成」「楠正成」「幽霊楠」など、楠正成に関係する曲が数多く上演された⁴。また、歌舞伎には『楠三代勇士』などの作品が上演され、後の『楠三代壮士』など時代物浮世草子に影響を与えたと考えられている⁵。正成伝説は浄瑠璃においても、土佐浄瑠璃や時代浄瑠璃の素材になっており、『太平記』を世界とする作品に主要人物として登場する。そして、その後も演劇以外にも浮世草子・談義本・読本・草双紙のような小説、あるいは川柳・狂歌など、それぞれのジャンルの

特徴に合わせてその姿を変えながら幅広く利用されている。

このように、近代以前の、正成像は国家に対する忠臣という絶対的なイメージには留まらない重層性を備えており、特に近世期の文芸ジャンルにおいては、各々のジャンルの特徴に合わせてその姿を変えている。本稿では、近世文学における正成像の多様性を示す代表例として、戦前教育においては正成の忠義を象徴する場面として採り上げられた「桜井駅の訣別」のエピソードを中心として、近世文学における同場面の描かれ方が、天皇制教育におけるそれとは大きく異なるものであることを論じながら、前近代から近代に至る中でナショナリズムの象徴としての正成像を形成する上でその多様なイメージが取捨選択されていった過程の一端を明らかにしていきたい。

2 天皇制教育における「桜井駅の訣別」の受容

天皇制教育と正成伝説の関係について論じた先行研究としては、中村格氏の「天皇制教育と正成像—『幼学綱要』を中心に」と「天皇制教育と太平記—正成・正行像の軌跡」とが挙げられる⁶。中村氏によると、天皇制教育にみられる楠公父子像は中世に生きた太平記のそれではなく、天皇のもとに国内統一を急ぐ明治新政府が臣民教化のために塗り直した「虚像」であり、この「虚像」が敗戦までの日本人の手本となり、学校教育にも君臨してきたという。しかし、このように「忠孝」の模範としてのモデルになった楠正成・正行の姿は「虚像」という一言で片付けてもいいだろうか。楠正成が最初に登場する『太平記』には確かに正成は忠臣として、正行は忠孝に励む人物として登場している。先述したように、これは近世期を通して形成されてきた正成像の一部であり、それを取捨選択して強調したもので、まったくの「虚像」とは言えない。

天皇制教育における正成の崇拜は、近世期を通して受け継がれてきた儒者たちの正成信奉から影響を受けている。中村氏も指摘しているように、儒教的歴史観に拠っている水戸学にいう「忠孝一体」「君臣一体」の教養と結びつき、天皇に対して命がけで忠誠を尽くすことがそのまま最大の「孝」として価値づけられることになる。このような、恩を媒介にした忠孝一体の教えは、以後の修身教科書にも一貫して受け継がれていく。したがって明治期から戦前までの天

皇制教育の場では、『太平記』に登場する正成本来の姿よりも、忠孝のシンボルとしての正成の性質が強調されることになる。それではまず、明治以降から敗戦直後までの学校教育の中で「桜井駅の訣別」をはじめとした正成伝説がどのように教えられてきたのかを、小学校の国史教科書を中心に検討してみたい。

正成と正行が小学校の教科書に頻出するようになるのは明治10年代以降であり、正成・正行父子を大きく採り上げて全国的に普及させたのは、同時期の教科書における代表的存在であった元田永孚編の『幼学綱要』である⁷⁾。これは明治15年に宮内省より地方長官を通じて国民一般に下賜され、明治17年ごろには各地の小学校へも頒布され、小学校の上級用または教師用としても広く使われた。その内容において、正成・正行父子の「桜井駅の別れ」などの本文の記述はほぼ頼山陽の『日本外史』を下敷きにしたものであるが⁸⁾、正成が正行を桜井駅に呼んで教訓を遺す「桜井駅の別れ」の場面では、「身ヲ以テ国ニ殉ジ。死有テ他無シ。」⁹⁾と死を以て天皇に尽くすことを強調している。また「湊川の戦い」でも、正成が弟正季と「七生滅賊」を誓いながら自害する場面で、死を前にして毅然とした態度をとる正成兄弟の姿が描かれている。

明治20年代後半から30年代にかけて普及した『小学修身訓』では、門口を守る犬の挿絵を載せた上で、正行に対する父の訓戒及び母の戒めを叙した琴歌二編を掲げ、犬でさえ飼主には尽くすという形で、楠父子の「至誠」「忠孝」を番犬のそれと並べて説く。そして、明治30年代以降の国語・唱歌の教科書では、父の遺訓を守った楠正行の忠孝譚が文章や挿絵、あるいは歌唱を通じて児童に強調されていくことになる。

その後、「南北朝正閏論」政争の後の、明治44(1911)年の『尋常小学日本歴史』以来、「南北朝」という用語そのものが抹殺され、『初等科国史』も「吉野朝」の存在のみを認定し、巻頭の「御歴代表」中では北朝の天皇が削除され、本文中にも足利氏の擁立した天皇・朝廷のことは一切触れられていない。

そして、第三期国定教科書『尋常小学国史』(大正9(1920)年改訂)では、「第二十三 楠木正成」と見出し自体を忠臣で構成する人物中心主義が打ち出される。そこに、これまで修身や国語教科書でしか扱われていなかった「桜井駅の別れ」のエピソードが登場して、章末では正成は古今忠臣の鑑にして、国民は皆正成のような真心を以って国のためにつくすべきであると結ばれるよう

になる。

昭和になると、『尋常小学国史』（昭和9（1934）年3月13日）では、第三期国定教科書『尋常小学国史』と同様に、別途に「楠木正成」という項目が設けられる。「桜井駅の別れ」では、正成が正行に「どんなつらい目にあつても、自分に代つて忠義の志を全うしてもらひたい。これが何よりの孝行であるぞ」¹⁰と告げており、忠義を孝行へと結びつけた遺訓の場面となっている。また、湊川神社や「嗚呼忠臣楠子之墓」の碑について採り上げ、正成こそが忠臣の鑑であり、国民全体が尊敬すべきことを示している。

昭和15年に刊行された『小学国史』は、『尋常小学校国史』の記事とほぼ同じ内容である。そして、昭和18年に刊行された『初等科国史』では、桜井駅で正成は正行に「父討死ののちは、母の教へをよく守り、やがて大きくなつたら、父の志をついで忠義をつくし、大君のために、朝敵をほろぼしたてまつれ」¹¹と告げており、母の教えを守るという内容が追加されている。また、「私たちは、一生けんめいに勉強して、正行のやうな、りつばな臣民となり、天皇陛下の御ために、おつくし申しあげなければなりません」¹²という正行に関する記述が示すように物語は教訓的な忠臣伝の色彩を強め、日本国民を忠良な臣民へと導くことを旨としたイデオロギー的な性格を帯びていく。

戦前の歴史教育の中核には常に楠正成が位置し、楠正成と一族を教材に用いた学科は、歴史のみならず、修身・国語・音楽に至るまでほぼ全科におよんでおり、楠正成を素材に用いた皇民化教育は徹底して行われていた。「桜井駅の訣別」は小楠公、即ち楠正行の忠孝の物語でもあり、幼い児童に忠孝の心構えを教えるには絶好の教材であつたに違いない。

しかし、こうして正成が天皇制教育の象徴として扱われた反動として、戦後の教育では正成に対する言及は非常に簡略なものになる。たとえば、戦後昭和21年に出版された『くにのあゆみ』では、正成に関する別途の項目はなくなり、足利尊氏を中心に叙述され、「九州でたくさんの武士をしたがへた尊氏は、大兵を海と陸の二手に分けて攻めのほりました。途中、湊川で正成をやぶり、勝ちに乗つて京都に攻め入りました。」（傍線部は筆者による。以下同。）¹³と、正成に関する記事は事実関係に関する叙述に留まっている。

このように楠正成とその一族は戦後になると教科書の中からその姿を消すよ

うになるが、楠公父子の「桜井駅の訣別」は戦前期の国史教育における「忠孝」の代表例であり、それ以前の江戸時代においても往来物の形で婦女子の教育に使われた形跡がある。しかし、近世文学における「桜井駅の訣別」の受容は教訓という形式の中に納まらない、より多様な形で描かれていた。そして、その多様な受容を支えた情報源となったのが、『理尽鈔』を始めとする「太平記読み」であり、それぞれのジャンルの文学作品は積極的に「太平記読み」の内容を取り入れながら、正成伝説を再生産していったのである。それでは、近世文学においては「桜井駅の訣別」がどのように描かれているのかを、『理尽鈔』との影響関係を中心に検討していきたい。

3 天皇制教育以前における「桜井駅の訣別」の受容

元々『太平記』における「桜井駅の訣別」の場面は以下のような内容である。北朝方の足利尊氏との戦いを前にした正成は、後醍醐天皇に対して一度京都を捨てて戦力を整えた上で再度戦うべきという作戦を奏上するが、藤原清忠により反対されたことでやむを得ず湊川に向うことになる。その途中、正成はこれが最期の戦いとなることを予感し、息子正行を桜井駅に呼んで次のように告げる。

正成^{コレ}是ヲ最期ノ合戦ト思^{オモヒ}ケレバ、嫡子^{チヤクシマサツラ}正行ガ今年十一才ニテ^{トモ}供シタリケルヲ、思フ様有^{ヤウアリ}トテ桜井ノ宿ヨリ河内ヘ返シ遣^{シユク}ストテ、庭訓ヲ残シケレハ、「獅子子^シヲ産^{ウン}デ三日ヲ経ル時、数千丈ノ石壁ヨリ^ス是ヲ擲^{セキヘキ}。其子、獅子ノ機分^{キブン}アレバ、教ヘザルニ中ヨリ^{チュウ}駈返リテ、死スル事ヲ得ズトイヘリ。況^{イハ}ヤ汝^{ナンヂ}已ニ二十才ニ余リヌ。一言耳^{ゴン}ニ留^{トドマ}ラバ、我教誡^{ワガケウカイ}ニ違^{タガ}フ事ナカレ。今度ノ合戦天下ノ安否^{アンビ}ト思フ間、今生ニテ汝ガ顔ヲ見^コン事^コ是ヲ限リト思フ也。正成^{スデ}已ニ討死スト聞ナバ、天下ハ必ズ將軍ノ代ニ^{ナリ}成ヌト心得ベシ。然リト云共、一旦ノ身命ヲ助ラン為ニ、多年ノ忠烈ヲ失^{ウシナヒ}テ、降人ニ出ル事有ベカラズ。一族若党ノ一人モ死^{シニコリ}残テアラン程ハ、金剛山ノ辺ニ引籠^{セン}テ、敵^{ヘン}ヨセキタ^{コモツ}ラバ命ヲ養由ガ失サキニ懸^{イヅ}テ、義ヲ紀信ガ忠ニ比スベシ。是ヲ汝ガ第一ノ孝行ナランズル。」ト、泣々申含メテ各東西ヘ別ニケリ。^{アル} 14 (引用中の

句読点は筆者が適宜補った。以下同。)

この「桜井駅の訣別」で正成は正行に庭訓を残しているが、まず前半部のように獅子が我が子を谷に突き落とす例を挙げつつ、父の死後にも力強く成長して天皇への忠義を守ることこそ親への孝行であると訓戒する。

ところで先述のように、近世期に入ると『太平記』は『太平記』本文よりも『理尽鈔』を通して広く受容されることになる。『理尽鈔』の記事の特徴は「伝」と「評」の二つの部分に分かれて、『太平記』の記事を補充し、かつ評価を述べている点で、「桜井駅の別れ」に該当する『理尽鈔』の記事も大筋は『太平記』の内容と同様であるが、その記事の中にはいくつか注目すべき点がある。

(1) 正行の母

○正成桜井にて^{マサツラ}正行に遺言の事。

○伝云、正成京を立ちし時までは兵凡六千余騎也。河内畚人を下して子息の正行十一歳に成りぬるを、「桜井の宿にて出相給ふ。申べき事有り」と謂遣しければ、千劍破に残し置きたる郎徒ども八百余騎供して来たり。楠、桜井の宿にて正行に^{そば}対面して、何よりもむつまじげにて傍近く呼び寄せ、びんのかみをなで挙げて申けるは、「今汝を呼び寄せし事は某最後の対面の為也。味方の軍勢^{いくさ}の軍仕たる有様、如何としても朝敵を亡ぼし難し。又君の仰も謀を回らし、敵を亡ぼし味方を進め、太平を致るべきに非ず。無^む二^ニの忠臣に「大敵に相ふて合戦仕れ」との宣旨ぞかし。此度計りの仰^{タノマ}〈にて^{天理本}〉にて侍らば^と兎も角も有りなまし。向後とても頼れざる御^サ行い共多ければ太平を致れん事叶い難し。正成今度討ち死にして候はば天下は尊氏が代と成んずるぞ。然りと云共、一旦家を立ん為、身命^{しんみやう}助けん為、父が忠烈を捨て降人に出る事有べからず。其為に一族若党余多付置き侍れば彼等を召し具して、敵寄せ来たらば^{こんこうせん}金剛山の城に籠りて、戦ふべし。凡そ所領のほしきと云も、家の榮へを好むも、人に人と呼ばれん為に候ぞ。賤しくも降参^{いや}・不義^{ふぎ}の行跡有りなば、榮へて人に指をさされなんずるぞ。領主に成りたりとも、何にかせん。無道^{ふつき}の富貴は恥たり。相構へて相構へ

て君に對し奉り後ろめだき分野^{ありさま}ゆめゆめ有るべからず。是汝が孝行たるべし。(中略) 是三つ。汝が長生^{ちやうしやう}ならん〈長生^{をとなく}ならん^{大橋本}〉までは諸事和田殿・恩地殿・矢尾殿を以て父と思ひ、^(ア) 毎事母に談ずる事なかれ。女性^{によしやう}は愚かなる物ぞかし。(中略) ^(イ) 国^{をさ}を政むるの道教十箇条、法礼の事自筆に書置き給ひぬ。巻物一卷に入て、正行に渡す。和田・恩地、其外の郎徒数百人新しき事の出来たる様に色を失ひ物も謂ず、顔をももちあげず、うつむきに成りて歎き居いたり。正行も父が謂置きし事共、肝^{きも}にめいじける上、巻物の箱ぞとて渡すを見て、声^{はつ}を發してはつとさげびけり。父も郎徒共も、ようようにすかし諫めぬ。正行申しけるは、「父に離れ參らせて河内ゑはかへるまじ。是非共軍の御供仕候」と申ければ正成に諫めて云「良^や、汝を留め置く事は不便也と計には非ず。君の御為なるぞ。此程の事聞き入ずんば最愚か也。君の御用にも立ち難し。後には降参・不義の心をや持つべし」などと、或はいかり、或は和して申ければ、正行幼き心にも是を聞き入けるが、「去ば仰に随はん」とぞ申けり。^(ウ) 父大に喜び「祖父正晴より持ち來たる刀也。我今まで身をはなさで持しぞ。我をこい敷と思はん時は、是見給へ」とて遣しぬ。(以下略) ¹⁵

これは『太平記』と同じく正成の正行に対する訓戒の場面であるが、ここで正成は傍線部(ア)のように、「毎事母に談ずる事なかれ。女性^{によしやう}は愚かなる物ぞかし」といい、母の忠告を盲信しないよう忠告している。このように、『理尽鈔』における正成は女性を愚かな存在とし、むしろ母に相談することを控えるよう告げているが、これは『太平記』本文にも見られない内容であり、同じく太平記評判の一種である『無極鈔』にも、また徳川光圀が『大日本史』の編集を行うにあたって修史の助けとするために今井弘済に命じ完成させた『参考太平記』にも記されていないもので、『理尽鈔』における正行の母の位置を垣間見ることができる個所であると言える。

この『理尽鈔』の記事を大いに参考にして創作されたと思われる通俗軍書の『南朝太平記』(馬場信意作、宝永6〔1709〕年刊)では「諸事母に語ることなかれ。和田殿・矢尾・恩地を以て父と思ひ、毎事此人々の計らひに任すべし」¹⁶と、『理尽鈔』と同様な内容になっているが、「女性^{によしやう}は愚かなる物ぞかし」に相

当するような表現は見られず、ここでは正成が正行に母より和田、矢尾、恩地などの部下たちにすべてのことを相談すべきと遺訓していることから、正成と部下たちの信頼関係の堅さを強調していることを読み取ることが出来る。

しかし、近世文学の中では、この『理尽鈔』における正行の母の扱い方だけが受容されていたわけではなく、『太平記』も含めた多様なエピソードの源泉が存在し、作り手たちはそれを取捨選択していた様子を検討したい。

『太平記』では正行の母久子は、巻十六の「正成首送故郷事」で、父正成の戦死を聞き、自害しようとする正行を諫めたという。これは『理尽鈔』の記事とは相反する内容で、戦前・戦中の歴史教科書の中ではこの『太平記』の記事に依拠し、次の『初等科国史』（昭和18〈1943〉年2月17日）第六「吉野山」二「大義の光」で示しているように正成は正行に母の教えに従うことを指示している。

正成は、宮居の松にしばし名ごりを惜しみ、決死の覚悟も勇ましく、兵庫へ向いました。途中、青葉に暮れる桜井さくらゐの駅で、子の正行をそば近く呼びよせ、「今度の合戦は、天下分け目の戦である。父討死ののちは、母の教へをよく守り、やがて大きくなつたら、父の志こころざしをついで忠義をつくし、大君のために、朝敵をほろぼしたてまつれ、もう十一にもなつたそなたを河内にかへすのは、そのためである。」と心をこめてさとししました。さうして、天皇からたまはつた菊水の短刀を、かたみとして、正行に与へました。¹⁷

また修身教科書には、「正行の母」の項目が別途に設けられ、あるいは皇后の内意を受けて著された女子用の道徳書である『婦女鑑』六卷（明治20〈1887〉年）では、正行の母を取り上げて、「正行廿三歳におよびける時。軍をおこして朝敵をうちなげけ。父におとらぬ武略をあらはし。大いに南軍の武威をかがやかし、は。またく母の教訓によれり」¹⁸と、正行の母は臣民国家の母の模範として紹介されている。

近世期の文学作品においても正行の母に関する物語は、『理尽鈔』よりも『太平記』に拠っている節が見える。西沢一風・田中千柳の作で享保10年初演

の浄瑠璃『南北軍問答』は、楠正成が湊川の合戦で自害した後の時代を舞台として、正成の妻実相院と息子正行を軸として展開する作品であるが、この『南北軍問答』では、楠正成の後室である実相院が近頃遊女三吉野との女遊びに溺れている息子正行を諫めるために「泣男」杉本佐兵衛を伴い、正行を訪れることから物語が始まる。その中の一場面として、次のように「泣男」杉本佐兵衛が正行を訪れた場面が描かれる。

お袋様ふくろよりのお使。杉本佐兵衛といふ侍参られ。何やら直に申上たいとりくつばつた顔つき。(中略)女中の案内に杉本佐兵衛。其名かくれも泣男。やり戸口うかにさし窺へは。近ふへと呼出す。はつと計にさしうつふき先。涙にぞくれにける。¹⁹

このお袋様とは正行の母、正成の妻である実相院で、「泣男」杉本佐兵衛はまず一人で三吉野の膝を枕に夢うつつの正行のところへ使者として参上し、正行に会い涙ぐみつつ、近頃正行が遊女遊びに熱中し、参内も滞っているのは情けないことだと母の口上を伝える。ここで実相院が送り込んだ「泣男」杉本佐兵衛とは、『太平記』には登場しないが、「泣芸」に優れていることを理由に楠正成に取り立てられた男として『理尽鈔』に登場する人物である。この場面では「泣男」杉本佐兵衛は歎きながら粘り強く正行を諫め、結局正行も自分の行動を後悔し、涙を流すことになる。しかし、ここに描かれる実相院が息子正行の不埒な行動を戒めるという構図は、『太平記』において正成の死を聞き、自害しようとする正行を戒める実相院のイメージを連想させるものであり、この事実から『南北軍問答』の作者は、『太平記』と『理尽鈔』の両方を念頭において創作していることが分かる。

このように正行の母、即ち正成の妻は『太平記』を世界とした浄瑠璃にしばしば登場し、それらは「女楠」物として受容されていた。楠正成の妻菊水が登場して活躍する作品としては、近松門左衛門作の浄瑠璃『吉野都女楠』(宝永7〈1710〉年初演)があり、歌舞伎では正徳3(1713)年3月3日初日の京亀座の記録が早い。特に、歌舞伎では二世芳沢あやめが得意とした女武道であった²⁰。父正成の死を悲しんだあげく自害しようとした正行を戒めた正行の母の訓戒

は、天皇制教育においては「桜井駅の訣別」とともに天皇に対する絶対的な忠孝の教材として扱われていたが、これは『太平記』や『太平記』を世界としている『南北軍問答』のような浄瑠璃作品から継がれてきた「正行の母」のイメージに着目していると言える。一般的に『理尽鈔』をはじめとする「太平記読み」の「伝」の部分に該当する記事は『太平記』を世界とする文学作品に大きい影響を与えていたが、正行の母に関する、『理尽鈔』の女性蔑視ともいえるべき記事は近世文学の中には深く浸透していたわけではない。

(2) 巻物一卷

そして、もう一つ注目すべき箇所は、先の『理尽鈔』「○正成桜井にて正行に遺言の事。」の引用の傍線部(イ)「国を政^{をさ}むるの道教十箇条、法礼の事自筆に書置き給ひぬ。巻物一卷に入て、正行に渡す。」の箇所である。『理尽鈔』には桜井の駅で正成が正行に巻物一卷を渡すという、『太平記』の記事には見当たらない内容が組み込まれている。この巻物一卷の記事はそれ自体が発展し、以降『楠正成一巻之書』をはじめとする正成の秘伝書の形で現われ、多くの作品に描かれることになる。

たとえば、秘伝書の一つである『楠桜井書』(寛文元年序、楠正成伝)²¹を例として採り上げると、その内容は以下のようなものである。

(前略) 予、武閥の家に生まれて聖君の勅恩を蒙り、臣と成り、義を重んずること泰山の如くし、命を軽んずることは鴻毛に似たり。噫、汝幼稚にして、予死して後、未だ軍慮を悟らざるを歎く。故に、余、数年試むる所の軍旨を記して一卷と成し、之を遺授す。汝、必ず君臣の礼を乱すこと勿れ。色に耽ること勿れ。諸民を勞すること勿れ。敵と雖も、五行の道に背くこと勿れ。孝行を軽んずること勿れ。賞を先にし、罰を後にして能く従士を嚴重して、常に此の書を誦し、心智を証得すべし。汝長となるに及びて、君のために忠を尽し、父のために仇を報い、堅く武名を守るべし。必ず、此の書の大意を亡失すること莫かれ。²²

その内容は傍線部のように君臣間の忠や父子間の孝を強調した教訓的なもので

あるが、本作は一般には作者を楠正成に仮託したものであると考えられている²³。

しかしながら、この有名な教訓も近世の小説作者には格好のパロディーの題材として利用されることもあった。たとえば、18世紀の半ばをすぎた宝暦・明和（1751～1772）のころまでの約80年間、上方を中心に行われた現実主義的で娯楽的な町人文学である浮世草子では、この巻物一卷を遊廓での行動指針書として描いている。

太左衛門ばしにて一子正之介をまねき、びんのかみかきなで、なみだをはらへとながし、おさなくとも今いふ事をみゝにとゞめよ。此たびみなどの酒がつせんには、につじやうのみじにとおほへぬ。此年月おや子三人がらくへとくらせしもみな兵六殿のおなさけ。今また酒ゆへ命すてん事**ぶし**武士のうちじにも同前、なげくべき事にはあらず。⁽⁷⁾**なんぢせいじん**汝成人の後も兵六殿にしたがひつきて、ずいぶん酒のけいこにゆだんなく、あつはれ日本にならびなき大上戸とよばれ、父が名をあげよ。それこそかうへ道のなれと、⁽⁴⁾なくへいさめてくわい中より何かはくはんを取出し、これは**しゆよくいちだいき**酒色一代記とて、京江戸大坂三遊のすいぶすいをわかち、色道の極意をしるせし、くわんこれをなんちゆづるへし。なを此うへに伝じゆ事あまたあり。²⁴

時代物浮世草子作品である『けいせい盃軍談』（正徳2〈1712〉年刊、作者不明）では『理尽鈔』からの影響を受け、楠正成をモデルにした梅太十郎という人物が登場するのであるが、傍線部に示したように、太十郎は本作品で末社の極意を記した『酒食一代記』という書物を正行をモデルにした正之介に与える。その内容は遊廓での色遊びの危険を正之介に対して戒めるものであった。

いかにかねのいせいなればとて、^{みやうが}冥加おそろしひ事なり。好色に身をよせんともがら、けいこくのいたり遊びをさきとして、それよりだんへ、次第さかりにちやくくらものまでおつれば、後はおのづといろぐるひのたけしれて、おかしからぬものなり。（中略）後はしんだいをはたく事、目

のまへなり。此心得第一の伝じゆ、かならず成人^{せいじん}ののちまでわする、事なかれ、²⁵

と、色遊びにのめり込むことの危険を戒めている。このようなパロディー化は、浮世草子というジャンルの特徴に起因する。

時代物浮世草子とは、古典の世界に仮託して、当世風に脚色したものであるが、その基本的な作り方は古典の借用と模倣であり、時に古典をその原典とは大きく異なる内容に作り替える、特に好色化・当世化するという手法が多く用いられた。即ち、楠正成をはじめ源義経や新田義貞など古典作品に登場する人物を当代の好色物浮世草子の世界に当てはめ、古典の当世化を成し遂げるという方法である。

この『けいせい壺軍談』は、『太平記』の楠正成と関連する部分を順次借用しながら、それぞれの舞台を遊廓に移して展開しており、北条家と後醍醐天皇との対立を、楠正成を中心にして描いている。主な登場人物は、嶋南の醍醐屋兵六と越後町の相模屋九郎七、即ち南朝の後醍醐天皇と北朝の相模入道こと北条高時であり、そして相模屋の死後登場する足代屋利右衛門、つまり足利尊氏も交えて、酒を飲む量を競う酒合戦を中心としながら、遊廓の風俗を描写していく。

『けいせい壺軍談』では、「桜井駅の別れ」における正成の教訓が太鼓持の心得として作り替えられている。その内容は先の引用の傍線部（ア）の通りで、忠孝の模範として儒学者たちの間で流行し、漢詩や画賛の題としてもしばしば登場する「桜井駅の別れ」の場面も、浮世草子では酒色に励み父の名を上げることが孝行の道であると語る太鼓持の心得を告げる場面となっている。

このように、時代物浮世草子は「正成伝説」の文芸化の過程で当世風という主題を提示するべく再構築された物語である。これらにおいては、当世化と好色化を基調として古典の人物を描き出し、あるいは古典作品中のエピソードを利用しながらパロディー化することで変わった趣向や面白みを作り出すという時代物浮世草子の手法が用いられる。それによって楠正成と正成にまつわるエピソードは当世化・好色化され、そこから正成像の新たなバリエーションが生まれていく。

(3) 菊水の刀

そして再度『理尽鈔』の引用に戻ると、『理尽鈔』ではさらに一つ『太平記』の内容と異なる箇所が存在する。先の引用の傍線部（ウ）は、「父大に喜び「祖父正晴より持ち来たる刀也。我今まで身をはなさで持しぞ。我をこい敷と思はん時は、是見給へ」と、正成が祖父から伝わる刀を形見として正行に渡す場面となっている。

しかし、『太平記』には、刀を直接手渡す場面は描かれず、この刀の存在は正成の没後、正行が正成を悲しんで自害しようとしている場面で初めて登場する。

(正行は) 流ル、泪ヲ袖ニ押ヘテ持佛堂ノ方ヘ行ケルヲ、母怪シク思テ
 則 妻戸ノ方ヨリ行テ見レバ、父ガ兵庫ヘ向フトキ形見ニ留メシ菊水ノ刀
 ヲ、右ノ手ニ拔持テ、袴ノ腰ヲ押サゲテ、自害ヲセントゾシ居タリケル。²⁶

これは『太平記』の巻十六の「正成首送故郷事」の一場面で、正行は「菊水の刀」を湊川に向う前に正成から受け取っていることになる。

つまり、『理尽鈔』によれば正成は祖父から伝えられた刀を与え、『太平記』では伝来は語られないが、「菊水の刀」なる刀を与えている。しかし、この刀は戦前・戦中の教科書においては、天皇への忠義の象徴として重要な意味を担っている。『尋常小学国史』では、「途中、桜井の駅に着いた時、かねて天皇からいだゞいてゐた菊水の刀を、かたみとして子の正行に与へ」²⁷（『尋常小学国史』、昭和9（1934）年）、また『小学国史』では、「正成は命を奉じて勇ましく京都を立つたが、途中桜井の駅で、子の正行に、かねて天皇からいだゞいてゐた菊水の刀を、かたみとして与へ」²⁸（『小学国史』、昭和15（1940）年）、また『初等科国史』では、「天皇からたまはつた菊水の短刀を、かたみとして、正行に与へました。」²⁹（『初等科国史』、昭和18（1943）年）というように、「菊水の刀」は天皇から下賜されたという価値が強調されている。これは、天皇への「忠誠」を強調するための設定であると思われる。

この「菊水の刀」は近世文学の中でも多くの作品に登場する。まず、浮世草子『春駒大内 輕』（其邑作、宝暦12（1762）年、改題本に『風流菊水巻』）があ

る。)には、楠正成と正為の兄弟が登場するが、正為は玉の井という遊女に入れあげ、名前を正木とまで替えて、遊廓に通う好色者として登場する。そして、玉の井の身請けのための金策に困った正為は楠家代々の家宝「菊水の名剣」に手を出す。

性は善なり。秀る草木にこだわりあれば。横にはしるとは。和田正ためか身の上。六条三すじ町の玉の井にふくなじみ。正木のかつら長居はおそれ。もろ大しんに見付られ。あやうきけんくわのさい中。でんの法印来かゝりて。玉の井身請十日のべ正木か利ふんに成しりども。身うけの金に手づかへて若気のいたりはずひもなく。御内の蔵へしのびこみ。しゅひよくめいけんぬすみ出し。四条の刀や五郎作に。金七百両の質に入。身うけ
調 小室の辺。しやく家しつらひ玉の井をは手いけの花とはなしつれども。
兄の正しげ重代の紛失したる顔もせず。つねよりしたしくしたまへは。
(以下略) ³⁰

と、正為は遊女玉の井を身請けするために、楠家重代の宝剣「菊水の刀」を刀屋の五郎作に質入れするという不埒な者として描かれている。

また、山東京山の合巻『宮城野信夫／小説娘楠樹』（六巻、文化5〈1808〉年刊）では「桜井駅の別れ」をモチーフに物語が展開しているが、ここにも楠家の宝剣は大きく関わっている。

延元元年の春、帝の勅命にて兵庫へ赴く時、一子正行が今年十二才にて供したりけるを、思ふ様ありとて家の秘密の一卷を与へ、桜井の駅より、本国河内へ還し遣はしけるとぞ、其次の日、正成、金江浪五郎を近く招き、汝幼き時より我側近く仕へ、心を見貫たれば申付るなり、此剣は、後醍醐天皇より賜りたる、初霜と云ふ名剣なり、正行に遣すべきを、事に紛れて忘れたり、汝本国へ持参なし、一子正行妻白菊にも、事の様子を申して渡すべしと言ふに、浪五郎、是は思ひ寄らざる命かな、人並ならぬ御情をも蒙りし身上、火水の中にも、御先途を見届け奉らんとこそ存じ候、斯る御使は余人へ仰付られ下さるべしと言ふに、正成、主人の心に背くかと叱り

給へば、詮方泣々剣を請取、悄焉と立去けり、正成此度の戦ひ、心ありてや一子正行を桜井より本国へ返し、浪五郎は寝所の塵をも払ひたれば、生命を助け、正行が力にも為してんと、態と用事を言付て本国へ還しけるとぞ。³¹

正成が兵庫に向う途中、桜井駅で息子正行に「家の秘密の一卷」は与えたが、「宝剣」を与えることを忘れたので、家来の浪五郎を遣わして「宝剣」を正行に渡すように命じる。これは正成が、湊川の戦いを目前にして一子正行を桜井駅より本国へ帰した後、正成と一緒に湊川に向かおうとする浪五郎の生命を助けることにより、浪五郎をして正行の手助けになれるように、わざと「宝剣」を渡さずにいたということである。ここで正成が家来の浪五郎をして正行に渡すことを命じた宝剣は初霜という名剣で、即ち「菊水の刀」のことであるが、ここでは後醍醐天皇から賜ったものと記しており、先祖代々の重宝であるという『理尽鈔』の記事とは異なる内容になっている。

4 おわりに

以上、本稿では近世文学における正成伝説の受容の様子を、「桜井駅の訣別」のエピソードを中心に検討してきたが、『太平記』の「桜井駅の訣別」のエピソードは、近世文学の中ではそのままの形で受容されたわけではなく、『理尽鈔』からも多大な影響を受け、『理尽鈔』の記事をモチーフとして、そこから触発された新しい物語が展開していく。たとえば今回検討したように、『理尽鈔』における「正行の母」や「巻物一卷」、「菊水の刀」の記事は、近世文学の中でそれぞれのジャンルの特徴に合わせてその内容が変容していくことになる。特に、『けいせい盃軍談』のような浮世草子作品の中では、舞台を遊廓に移すことにより、その好色化・当世化された状況に合わせて、「桜井駅の訣別」のエピソードも、即ち「正成の庭訓」も、酒色教訓など滑稽や好色に彩られた内容に変容していく。

このように、近世文学では多様性を持っていた正成伝説であったが、楠正成を素材に用いた皇民化教育の場では巧妙かつ強制的に正成伝説は天皇への絶対

的な忠誠の在り方を示しているというイメージだけが植えつけられてきた。しかし、このように近代国家の作った「正成＝忠臣」というイメージは本当に幻のような虚像として意味づけるだけでよいのだろうか。先行研究の指摘の通り、皇室への絶対的な忠誠が国民の徳目として強調されているのは確かな事実であるが、「正成＝忠臣」という構造は前近代から継承されてきた一般的な正成像の一面でもあった。

元禄4（1691）年に徳川光圀が『大日本史』の編纂を行うにあたって、修史の助けとするために刊行した『参考太平記』は、『太平記』の最初の本格的な研究書で、記録性・事実性を第一に考えたために中国の故事などを省いたほか、その「凡例」では、「太平記評判、大全等、並不_レ足_レ論。故不_レ取。（太平記評判、大全等、並て論ずるに足らず。故に取らず。）」³²として、『理尽鈔』などの評判類を意識的に斥けており、それらが近世では第一線の研究において採り上げられなかった事実を示している。

このように、前近代の人々においては、それぞれのジャンルや立場により正成伝説も取捨選択され、時に正成の智略家としての一面が強調され、また時に忠臣としての一面が強調される。たとえば、戦国時代の終わりから近世初頭にかけては、楠木流の軍学が勃興して一世を風靡した影響もあり、朝廷への忠義の側面よりも赤坂・千早でみせた希代の兵略の方が人々の注目を集めていた。こうした流れの中、近世文学における正成は智仁勇三徳を兼備した武将として幅広い人気を得ていたが、その多様な正成像が、国家意識の芽生えとともに「忠孝」の名のもとに取捨選択されていくことによって、国家の英雄としての正成像だけに光が当てられていくことになったと言える。

註

- 1 兵藤裕己氏によると、赤穂浪人の仇討ち事件の前年、元禄14（1701）年に刊行された雑俳集『寄太鼓』に、「楠が御目見えをする講釈場」という一句があり、元禄ごろの講釈場では、楠正成が代表的な出し物とされていたらしい。（兵藤裕己『太平記〈よみ〉の可能性—歴史—という物語』〈講談社、2005年〉）。
- 2 吉田松陰は安政3（1856）年4月、かつて三度兵庫湊川の正成墓所を訪ねた感慨を「七生説」で記し、自らを正成の生まれ変わりに擬している。
- 3 近世期に入って『太平記』を素材にした通俗軍書として『楠氏二先生全書』、『南朝太平記』、『三楠実録』、『楠廷尉秘鑑』など多数出版されるが、その中でも『楠氏二先生全書』は、その序文に該当する「発題」の内容から見て寛文2年頃に刊行

されたと推測されるが、その題目からも分かるように、楠正成・正行父子二代の事蹟を叙述し、その智謀・忠節を賞揚して軍記作品化した最初のもので、『理尽鈔』の記事を主軸とし、それに『太平記』の記事を加えて巧みに再構成した作品である。

- 4 『太平記』に取材した謡曲は古謡曲には極めて稀で、室町末期から江戸時代初期にかけて急に流行しだしたようである。江戸時代初期に編纂された『新謡曲百番』になると、『太平記』の人物や事件に取材したものが数多く見られるようになる。また、古典文庫『未刊謡曲集』に紹介されているものの中にも『太平記』に題材を得たものが散見される。(鳥居フミ子(著)『近世芸能の研究 — 土佐浄瑠璃の世界 —』(武蔵野書院、1989年))。
- 5 浮世草子作品である『楠三代壮士』の序には「むかし咄を菊屋酒茶碗に引かけて。のんだほど我知がほに古老の物がたり。取集て三代壮士と。狂言づくしの看板をそのまゝの題号」とあり、享保四年春、大阪の竹島幸左衛門座で上演された歌舞伎狂言『楠三代男』の外題をそのまま用いていることが分かる。この作品は三の巻以下に国横領の陰謀の話があり、由比正雪一件を仕組んでいた。(長谷川強(著)『浮世草子の研究 八文字屋本を中心とする』(桜楓社、1969年))。
- 6 以下の本文叙述中、近代教科書に関する箇所は主に中村格氏の論文に依拠している。
- 7 明治初期には文明開化の翻訳教科書類が流行り、福沢諭吉は『学問のすすめ』で「正成権助論」を主張するなど、楠父子の物語はまだ教科書に大きく取り上げられていなかった。
- 8 中村格「天皇制教育と正成像 — 『幼学綱要』を中心に」(『日本文学』39巻、1990年1月)。
- 9 『幼学綱要』(『日本教科書大系近代編』第2巻「修身」(2)〈講談社、1975年〉)。
- 10 『尋常小学国史』(『日本教科書大系近代編』第20巻「歴史」(3)〈講談社、1977年〉)。
- 11 『初等科国史』(『日本教科書大系近代編』第20巻「歴史」(3)〈講談社、1977年〉)。
- 12 前掲『初等科国史』。
- 13 『くにのあゆみ』(『日本教科書大系近代編』第20巻「歴史」(3)〈講談社、1977年〉)。
- 14 後藤丹治・釜田喜三郎(校注)『太平記』二(『日本古典文学大系』35〈岩波書店、1961年〉)。
- 15 今井正之助・加美宏・長坂成行(校注)『太平記秘伝理尽鈔』4(『東洋文庫』763〈平凡社、2007年〉)。
- 16 馬場信意『南朝太平記』(国史研究会、1914年)。
- 17 前掲『初等科国史』。
- 18 西村茂樹『婦女鑑』(宮内省、1887年)。
- 19 西沢一風『南北軍問答』(西沢一風全集刊行会『西沢一風全集』第五巻〈汲古書院、2005年〉)。
- 20 延享2(1745)年11月江戸市村座で、顔見世狂言として上演された『婦楠親粧鑑』では、楠の女房菊水に二世芳沢あやめが配役された。番付の小名題は、第一「吉野都」、第二「桜井宿」、第三「兵庫浦」、第四「吾妻森」とある。登場人物名から判断して世界に『太平記』をとり、趣向の一つ、二世芳沢あやめの扮する楠正成の妻菊水が腰元山吹と身をやつし、漬物をする場面が見せ場であった。この趣向は「大根漬け」と通称されるほどで、初世芳沢あやめが正徳3(1713)年11月江戸中村座に下った時の顔見世狂言『女楠天下太平記』において演じ好評を博した。これにあやかって二世も江戸の顔見世に演じたものであろうが、二世は不評であった(鳥越文蔵「婦楠親粧鑑」、『日本古典文学大辞典』第1巻〈岩波書店、

1983年))。

ところが、宝暦2(1752)年11月京都嵐座で上演された『天下太平記』では、あやめの楠妻菊水と榊山小四郎の楠、何れも大評判であった。また、明治になっても「女楠」物は続いていた。明治25年3月歌舞伎座で上演された『新歌舞伎八番の内／女楠』(即ち、『求女塚身替新田』)は、福地桜痴が九代目团十郎のために『太平記』の本文によって活歴風に脚色したもので、ここで正成の奥方柏の前は、正成が討死した後、正行があまりの悲しさに父の遺品である菊水の短刀で切腹しようとする際、懇ろにその不心得を誡める。(飯塚友一郎『歌舞伎細見』〈第一書房、1926年))。

- 21 楠正成の体験に基づく軍慮軍旨を正成自ら記して一卷となし、楠勝五郎に遺授したものとして、寛文元年に公けにせられたもので、全一卷から成っている。(岸本芳雄「江戸時代における楠公崇拜思潮」〈神道宗教学会『神道宗教』110号、1983年))。
- 22 原漢文、堀江秀雄『武将としての楠公』(財団法人奉公会、1938年)所収。
- 23 前掲、岸本芳雄「江戸時代における楠公崇拜思潮」。
- 24 吉田幸一・高橋喜一編『けいせい盃軍談』(古典文庫第649冊〈古典文庫、2000年))。
- 25 前掲『けいせい盃軍談』。
- 26 前掲『太平記』二。
- 27 前掲『尋常小学国史』。
- 28 『小学国史』(『日本教科書大系近代編』第20巻「歴史」(3)〈講談社、1977年))。
- 29 前掲『初等科国史』。
- 30 東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成。
- 31 山東京山『宮城野信夫／小説娘楠樹』(六巻、文化5〈1808〉年刊、東京大学総合図書館蔵)。
- 32 今井弘済・内藤貞顕(考訂)『参考太平記』(四〇巻四〇冊、元禄4〈1691〉年、東京大学総合図書館蔵)。

<ABSTRACT>

“The Parting at Sakurai” in the Legend of Masashige

LEE Chung Ho

During the years of Japanese imperialism prior to Japan's defeat in the Second World War, Kusunoki Masashige, a 14th-century warrior, was idealized and extolled in the domain of nationalistic and colonial education as a perfect embodiment of absolute loyalty to the Emperor. The image of Masashige as an exemplary imperial subject has survived to this day. Nevertheless, if one looks to Japanese texts written in the years before the birth of the modern Japanese nation-state, one encounters more complex and diverse representations of Masashige. In the early modern period, *Rijinsho*, a book of commentaries on *Taiheiki*, led the way in transforming and remolding the original medieval legend of Masashige found in *Taiheiki*, via retellings of various episodes and theoretical analyses of political and military tactics. At the same time, a wide range of other early modern texts also participated in the refiguring of Masashige's legend. For example, by citing from such sections as “Masatsura's Mother (*Masatsura no Haha*),” “A Scroll (*Makimono Ikkan*),” and “Sword with the Chrysanthemum-Water Crest (*Kikusui no Katana*)” in *Rijinsho*, those other texts freely adapted “The Parting at Sakurai (*Sakurai Eki no Ketsubetsu*),” a critical scene in which Masashige's loyalty to the Emperor is revealed, to fit whatever genre or mode in which they were written, from that of a historical narrative to that of pornography. Masashige gained widespread popularity in early modern Japan through multifarious representations in literature as a versatile warrior possessing all three of the most important chivalrous virtues—wisdom, benevolence, and valor—but the rise of the Japanese modern nation-state coincided with a reductive collapsing of the polymorphous figure into a narrower and one-sided conception of Masashige as a national hero epitomizing only loyalty and filial piety.